

H28海外臨床実習

渡航先	モナシュ大学
国・地域	オーストラリア

番号	報告者	渡航先機関での 受入期間
1	K. T	H29/1/9-H29/2/3
2	T. D	H29/1/9-H29/2/3

## 平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5 年

K. T

オーストラリア、アルフレッド病院では、呼吸器免疫アレルギー内科 (Allergy Immunology Respiratory Medicine) にて実習させていただいた。普段の実習ではカンファレンスに参加、回診に同行するのを基本とした。以下に日ごとのスケジュール一覧表を示す。

表 1 : 海外活動中のスケジュール一覧

月	火	水	木	金
1/9	1/10	1/11	1/12	1/13
ID 発行、事務手続き	放射線カンファ、回診、診療科カンファ	回診に同行	回診	外科合同カンファ、回診
1/16	1/17	1/18	1/19	1/20
回診	放射線カンファ、回診、診療科カンファ	回診	回診	外科合同カンファ、回診
1/23	1/24	1/25	1/26	1/27
検鏡カンファ、回診	放射線カンファ、回診、診療科カンファ	CABG 見学、外来見学	祝日	胸部外科見学
1/30	1/31	2/1	2/2	2/3
手術前処置見学、移植見学	(日付を跨いだ移植見学)	回診	回診	外科合同カンファ、回診

### ・目的

肺移植前、移植後、そして移植中の患者さんの状況を学ぶことで、日本ではそれほど数の多くない移植症例について体得することを目的とした。

### ・内容

回診ではインターンの先生について、その先生の受け持ち患者さんの回診に毎日同行した。診察は問診、触診や聴診などを行い最後に患者さんに今後の計画について説明を行っていた。患者さんによっては聴診をさせてもらったり、触診をさせてもらったりした。希望してプログレスノートに記載させていただいたこともあった。回診以外にも、移植前患者さんのアセスメントに同行することもあり、そこでは患者さんの病歴やアレルギー、社

会生活歴など全てを問診していた。

放射線カンファレンス、検鏡カンファレンスでは普段病院で執り行われているカンファレンスに参加し、興味深いことにその CT 写真、X 線写真などを勉強することができた。また、外科合同カンファレンスでは移植のレシピエントになりうる患者さんのケース・スタディを行った。移植患者さんの中には日本では稀少とされている **Cystic Fibrosis** の患者さんが一定の割合数いらっしやり、日豪の違いをまざまざと感じ取ることができた。

希望して胸部外科の見学を行った日もあった。胸部外科の実習では CABG 見学、外来見学、肺移植見学を行った。外来見学では患者さんの血圧を測らせてもらったり、また患者さんと雑談をしたりした。オーストラリアに住んでいる人全員が英語を流暢に話せるわけではないということも、外来見学で知りえた大きな事柄であった。移植見学では、清潔で手術に参加させていただいた。深夜帯の手術ということも重なり、逼迫した状況の手術であるということが肌で感じ取られたが、手術中、冠血管に空気が入り心停止に陥った患者さんが開胸心臓マッサージにて一命を取り留めたことは劇的であり、ひどく驚かされた。

#### ・成果

まず、英語力の飛躍的向上があげられる。海外においては自己主張しないと何もさせてもらえないことが多々あり、それを克服するためには何はともかく喋らざるを得なかった。オーストラリアは移民などによって多くの人種が集まった国であり、英語を第二言語として仕事をしている人も多い。自分と同じような人種と思しき人がひどく流暢に英語を話している場に居合わせることは同じアジア人として非常にいい刺激となった。

次に医学という視点からは、今まですべての医学の勉強を日本語で行ってきた身として、表現したいことが上手く翻訳できない、などの障壁が往々にしてあった。これは実習中に辞書を用いることで何とか乗り切ってきたつもりではあるが、これから将来国際的になろうと思っている身として英語の勉強、特に医学を英語でも勉強することの重要性を学んできた次第である。

#### ・今後の抱負

海外という点においては、先の項目でも述べた通りではありますが、英語の勉強、医学英語の勉強に力を入れ、将来国際的になるために日々邁進していく所存であります。また医療という点においては、オーストラリアに引けを取らず進んだ医療制度の整っている我が国日本で、将来さらに良い医療を提供できるよう、残り少ない学生生活でより一層勉学に打ち込んでいく次第であります。

今回は日本とオーストラリアの医療現場の違いを体得させていただきましたが、将来機会があれば第三国の医療も経験させていただきたい、と意気込んでおります。

・謝辞

本留学に際し、奨学金をご支援くださった岸本先生をはじめ、留学をご許可くださった諸先生方、教育センターの先生方ほか関与くださった先生方全員に深く感謝申し上げます。海外実習という貴重な経験をさせていただき、誠に感謝しております。この経験を今後に生かしますよう、日々邁進して参ります。

## 平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5 年

T. D

【留学先大学名】 Monash University (Australia Melbourne)

【実習先病院】 Alfred Hospital

【診療科】 Trauma Services

【渡航期間】 2017 年 1 月 7 日～2017 年 2 月 5 日

【大まかな実習内容】

Monash University の交換留学生として Alfred Hospital の Trauma Service において臨床病院実習を行った。実習内容としては、放射線画像カンファレンスへの参加、引き継ぎカンファへの参加、病棟回診の見学と補助、Emergency Department での救急外来治療の見学と補助、緊急対応の反省会への参加、病院設備の見学、CC・ICU の見学、豚の胸部を用いた胸部ドレナージチューブ挿入のシミュレーション、血管カテーテル留置のシミュレーション、気道確保のシミュレーション、救急患者対応のシミュレーション、FAST エコー実習、講演会への参加などを行った。また、虫垂炎、壊死性蜂窩織炎、腹部裂傷などの手術の見学もさせていただいた。

実習日程としては以下のような日程で実習をさせていただいた。

1/9 午前 Monash 大学訪問、登録手続き 午後 Alfred 病院見学

1/10～2/3 Alfred 病院 Trauma Service において病院実習

2/4 Alfred Centre にて新人医師向けのオリエンテーションに参加

実習初日は午前 Monash 大学 Clayton Campus にて登録手続きを行い、午後は Alfred 病院にて同じく実習をするための登録手続きを行った。登録手続きがすべて終了した後は、病院内を見学させていただき、手指衛生の講習を受けた後解散となった。

実習二日目からは Alfred 病院 Trauma Service において病院実習を行った。病院実習は基本的に 1/10～2/3 の平日に行い、土曜日・日曜日は休みであった。1/20 金曜日に Melbourne の市街で Bourke Street Incident が発生し、Alfred 病院にも多数の被害者（加害者も）が運び込まれるという事態が発生したため、1/21 土曜日に関しては病院に伺って被害者や加害者の状況に関するカンファレンスに出席させていただき、病棟回診もつ

かせていただいた。

最後の土曜日（2/4）には医師向けのオリエンテーションに誘っていただき参加させていただいた。講演会に参加させていただいたり、豚の胸部を用いた胸部ドレナージチューブ挿入、豚の気管を用いた気管切開とカニューレ挿入、風船を用いたカテーテル留置、模型を用いた気道確保、中心静脈ルート確保などを経験させていただいた。またエコーを用いた実習や、救急外来シミュレーションの患者役を務めさせていただいた。

一日のだいたいの実習のスケジュールは以下のものであった。しかしいろいろな先生につかせていただき毎日スケジュールは一定ではなかった。数多くの先生方にお世話になり、いろいろな手技や診察、様々な症例を見せていただいた。

7:30～ カンファレンス

9:00～ コーヒー休憩

9:30～ 病棟回診、救急外来見学

13:00～ 昼食、医師の方々と金曜日はブッフェランチ

14:00～ 救急外来見学、病棟治療見学、カルテ記録、手術見学など

カンファレンスでは主に前日に行った X 線画像や CT 画像などを **Trauma Team** で確認を行い、**Professor** や **Consultant** を中心に当日の方針などをディスカッションすることをしてきた。このカンファレンスの際に入院患者の大まかな状態やその日の **Plan** をまとめたレジュメがもらえるので、僕を含め学生はその中のわからないところや先生方のディスカッションの中で疑問に思ったことなどをメモしておいて暇が出来たときに先生方に質問するか **Google** で調べるなどして勉強をしていた。

カンファレンスが終わると特別忙しい日以外は病院の中庭のカフェでコーヒー休憩を取り、今日の治療の方針を相談したり、雑談を楽しんだりしていた。週 3 回くらいはコーヒーをごちそうしてもらっていたような気がする。メルボルンはほぼ毎日快晴であり 9 時頃にはもう暖かく、日差しも快適で、非常に心地のよい時間であった。

コーヒー休憩にはその日の予定にもよるが多くは病棟回診に付かせていただいた。**Alfred** 病院は非常に大きくまた **Trauma Team** は病棟に加えて **ICU**、**ER** などにも患者がいるので回診では非常に多くの症例をみることが出来た。病棟回診は患者数も多く非常に時間がかかるが、家族がお見舞いに来ているところが非常に多く、患者やその家族に対して非常に丁寧に説明を行い、質問にも時間を惜しまずに優しく受け答えしていたのが印象的であった。どちらがいいというわけではないが、日本にいるときに経験した回診より賑やかで、雑談も多い印象であった。日本では多くの医師がマスクをつけているが、オーストラリアでは特別に免疫抑制などで注意が必要な患者に会うときなどを除いてマスクをつけている医師は一人もいなかった。感染防御の観点からすればあまりよくないが、あまり

感染を気にしなくていい場合には医師の顔がちゃんと見えることは患者にとっていいことなのかなと思った。回診中医師はよく笑い、また患者をよく笑わせていて、これはいいことであると感じた。Alfred 病院では画像などはコンピュータを使って見るが、カルテは基本的には紙カルテであった。先生方は紙カルテでの診療はカルテを探す作業が時間の無駄であるし、字が汚いと読みにくいし不便であるが、完全に電子カルテに移行するにはあと10年くらいかかると思うとおっしゃっていた。回診で患者を回るたびにその患者の紙カルテの入ったファイルが必要になるので学生は必要になったファイルを持ってきて、カルテ記入が終わったファイルを元に場所に戻すといったことをして手伝いながら回診について回った。ほかにも回診についている際に、ちょっとした診察をさせていただき指導していただいたり、診察の手伝いをさせていただいたりすることができた。メルボルンには観光客が多く、またメルボルン市民でも英語を離さない人もいて、Alfred 病院では英語で自在にコミュニケーションをとることはできない症例も多くあるようであったが先生方もいろいろと工夫して患者の症状を聞き、診療を行っていた。連日回っていると患者の状態が日に日によくなっているのを実感し、また患者と少しずつ仲良くなれたりもして、非常にいい経験であった。

外傷患者を受け入れる病棟で実習をさせて頂いたが、外傷の原因としては交通事故（最多）、転倒、転落、自殺企図による腹部刺創、襲撃による野球のバッドでの殴打、被弾など様々であった。馬に蹴られた、水上スキー中に股関節が外れた、サーフボードのフィンが肛門に刺さったなどのケースもあった。また外傷患者でありながら、ほかの疾患を抱えていて治療の際に注意が必要な症例や、宗教上の理由で輸血が出来ずほかの対応を考えなければならない症例など一筋縄ではいかない症例も様々なものを見せていただき、それぞれの患者の治療も説明していただいたり見せていただいたりすることができ、大変勉強になった。救急外来に患者が運ばれてきてすぐの **Primary Survey**, それに引き続き行われる **Secomdary Survey**, 病棟に入院した後の **Tertiary Survey** をすべて経験させていただいた。外傷患者に緊急で手術が必要となった場合には **General Surgery**, **Neurosurgery**, **Plastic Surgery**, **Cardiac Surgery** などに患者が送られるが、**General Surgery** の患者の手術を見学させていただくことも出来た。

### 【実習の成果】

カンファレンス、診療、講演等全てが英語で行われる環境において勉強することができ、自分も英語でコミュニケーションをとる機会を持つことができた。英語で患者さんが症状を説明するときや、医療者が診療を行うときなどにどういった英語が使われるのか、どういう表現の仕方をするのかなど非常に勉強になり、今後外国の患者の対応をする時などに役立つと思う。

また、Alfred Hospital の Trauma Service は Victoria 州中の外傷患者を受け入れる

オーストラリアで最も充実した設備、人材を誇る活発なチームであり、日本では経験できないような数の外傷患者を重症軽症含め経験することができた。お世話になった医師や Paramedic の方たちは非常に親切で教育的であり、診療見学やレクチャーを通して医学的にも重要な教訓を多く得ることができたと思う。

僕が実習している際には Melbourne Bourke Street Incident(2017/01/20)が発生し、大量の患者が運び込まれる緊急災害対応も見学した。短時間に多くの外傷患者が運ばれ、加害者も警察に銃弾を肩に打ち込まれた状態で警察とともに ER に来るといった状態で普段は広い ER も人であふれかえっていたが、Trauma Team の方々が迅速に落ち着いて指示を出し、処置を進めていく様子を見て感銘を受けた。緊急災害対応が一旦落ち着いたところですぐに対応の反省会が 40 人くらいの規模で行われ、そこにも参加させていただいたが、活発に意見交換がなされ皆で労をねぎらい合う様子を見ていて、非常にチームワークがよくできていると感じた。

新米医師のためのオリエンテーションにおいて胸部ドレナージチューブ挿入や気道確保などの訓練にも参加させていただくことができ、貴重な体験をさせていただいた。その際に模擬患者役も務めさせていただき、間近で診療の仕方を見て、解説を聞くことができて大変勉強になった。

同じく病院実習をしていた Melbourn University や Monash University の学生と交流することもでき、有意義であった。出会った学生はみな勤勉であり自分からやることを見つけよく先生方に質問をしていて、また先生方も非常に親身になって質問に答え、治療の説明などをしていた。充実した自分の実習に加えて、現地の学生がどのように実習で勉強しているのかを間近でみることもできたのも刺激的でとてもよかったと思う今後の学習に際し、大きなモチベーションとなった。

#### 【実習の感想】

ともに高いレベルの医療水準をもつこともありオーストラリアで見学した治療や器具、設備などは日本と同じ部分も多くあったが、医師の患者に対する友好的で親身な対応には感銘を受けた。

日本で救急の実習を回っていたこともあり、日本の救急とオーストラリアの救急（外傷患者のみであるが）のそれぞれのいいところを発見できたのは良かったと思う。

またオーストラリアの医師や Paramedic の方々、学生の方々の勤勉さ、懐の深さ、優しさに強く刺激を受けた。慣れない環境の中わからないことが多く不安もあったが、いろいろな方にサポートをいただき、教育していただいたおかげで充実した実習をさせていただけて大変感謝している。自分も今後努力し力をつけて、こういった医師になりたいと感じた。今後の目標となるような素晴らしい人たちに出会えたことは、今後の勉強や訓練に対する非常に大きなモチベーションとなった。



語学力の点でも、英語でコミュニケーションをとったり、勉強したりする経験を多く積むことができたことは非常に良かった。今後医学生として、医師として英語は大切になると思うので、この経験と培った語学力は今後の大きな糧となると思う。また、今回の留学を通してある程度のご学力の向上は実感したものの、まだまだ十分に英語を使ってコミュニケーションをとるためには力不足であることを感じたので、今後も医学の勉強に加えて英語の勉強もしっかりしていきたいと強く思った。

Monash 大学への海外臨床実習を通して、貴重な体験をさせて頂き、Alfred 病院で出会った医師の方々、Paramedic のの方々、学生の方々、患者の方々から大変刺激を受けた。今後医師としての能力や英語力を伸ばしていくために、今まで以上に努力していきたいと思う。

#### 最後に

留学に際し、岸本先生、岸本交際交流奨学金基金の方々、医学科教育センターの先生方に大変お世話になりました。特に Monash 大学との交換留学は今年がはじめての年であり、わからないことも多く手続き等でお手数をおかけしてしまい、またお金も予想していた以上にかかってしまいましたが、いろいろとサポートをいただけたおかげで大変有意義な実習を実現させることができました。お世話になった方々に、心からお礼を申し上げます。おかげさまで最高の経験をさせていただきました。ありがとうございました。